

やけたトタン屋根の上の猫

新訳上演

Cat on a Hot Tin Roof

小劇場

●前売開始：2010年9月12日（日）

作： テネシー・ウィリアムズ

翻訳：常田景子

演出：松本祐子

出演：寺島しのぶ／北村有起哉／広岡由里子／銀粉蝶／木場勝己／市川 勇／三上市朗（台本順）ほか

企画意図

「JAPAN MEETS…」シリーズ二作目は、アメリカの劇作家、テネシー・ウィリアムズの『ガラスの動物園』、『欲望という名の電車』と並ぶ傑作戯曲であり、1955年のピューリッツァー賞を受賞した作品『やけたトタン屋根の上の猫』が登場。

エリヤ・カザン演出によるブロードウェイでの大成功に続き、58年には、エリザベス・テーラー、ポール・ニューマンの主演により映画化され、ウィリアムズ自身が自分の戯曲作品の中で一番のお気に入りと言っているこの名作には、作者自身の姿と思いが他作品以上に色濃く映しだされています。

ウィリアムズは「人から人へ」と題した、戯曲の巻頭文の最後にこう書き記しています。「それはともかく！—この私はあなたがたに語り続けたい、私たちがなんのために生き、また、死ぬのか、かくしへだてなく存分に語りたい、まるで私があなたがたの知りあいのだれよりも親しい友であるかのように。」と。

人間と人間のぶつかり合いからでしか生まれる事がかなわない真実の姿に、寺島しのぶ、北村有起哉、木場勝己をはじめとした実力派キャストが挑みます。

作 品

舞台はアメリカ南部の大富豪の家。一代で大農場を築き上げた一家の主（ビッグ・ダディ）は、体調を崩して受けた健康診断の結果、癌に侵され余命いくばくもないと判明するが、本人には健康体と知らされていた。この家の次男ブリックは、愛する友人の死をきっかけに酒びたりの生活を送り、その妻マギーは、ある事件を境に失いかけている夫の愛を取り戻そうと必死だった。また、長男グーパーとその妻メイの夫妻は、父の病状を知って、遺産相続を有利に運ぼうとしていた。

ビッグ・ダディの誕生日パーティーに集まった二組の夫婦、母親ら、一見なごやかな家族の団欒の中から、親子、兄弟、夫婦そして家族たちの「嘘と真実」が白日のもとに曝されて行く……。

●料金 A：5,250円・B：3,150円

翻訳家からのメッセージ

常田景子

テネシー・ウィリアムズは、日本で最も人気のある海外劇作家の一人ではないでしょうか。そのウィリアムズの作品の中でも、『やけたトタン屋根の上の猫』は、『欲望という名の電車』『ガラスの動物園』について、最もよく翻訳上演されている作品だと思われます。当然すでに複数の名訳があるので、今回、新国立劇場から翻訳を依頼された時は、正直に言って少し驚きました。それだけに、身の引きしまる思いがします。テネシー・ウィリアムズが、自分の書いた戯曲の中で一番好きな作品だと語ったというのもなるほどと思われる、多面的で濃密なドラマです。1955年に発表された、アメリカ南部の大農園を舞台とする芝居ですが、描かれている夫婦、家族の葛藤は、生と死をめぐる普遍的な深さと重みを持って私たちに迫ってきます。

演出家からのメッセージ

松本祐子

—『やけたトタン屋根の上の猫』に寄せて

もしもテネシー・ウィリアムズが、バーチャルなコミュニケーションが全盛の今の時代に降り立ったら、どうなってしまうだろうか？ 発狂する？ アルコールに逃げる？ 誰かと繋がりたいくて、街角で大声で詩を叫ぶ？ それとも、新しい傑作を書きあげる？

どうして、こんなことを考えてしまうかという、彼ほど他者と“本当の意味で語り合いたい”という欲望を強く持っている劇作家はいないと思うからである。そしてその欲望とともに、そもそも真実のコミュニケーションなんて不可能なのかもしれないという絶望を抱えて苦しんでいるのがテネシー・ウィリアムズだからだ。彼のごく初期の作品『Not About Nightingales』の中にも、『地獄のオルフェ』の中にも、そしてこの『やけたトタン屋根の上の猫』の作者自身の序文の中にも、繰り返し繰り返し出てくる彼が考えるところの人間のコミュニケーションのありようは「生涯を独房に監禁された囚人が、同じ境遇の囚人に向かって自己の監房から呼びかける悲鳴」であり、彼の願望は「あなたに向かって語り続けたい。私たちは何のために生き、そして死ぬのかを腹藏なくうちとけて語り続けたい。」というものである。真実であるという確信は、あまりにも脆いもので、ほとんどの会話は嘘の上に成り立っているわけなのだが、そんな“なまぬるい”コミュニケーションではなく、もっと剥き出しのひりひりとした、相手を切りあって血を浴びることで初めて実感できる厳しい対話を求める彼の言葉は、相手を傷つけること、相手から傷つけられることにひどく臆病な今の日本の社会には、疫病神のような、奇跡のような何かとして光ることだろう。「人間の経験の真実の姿をとらえる器としての演劇」を求めて、己の傷をさらけ出して言葉を紡いだテネシー・ウィリアムズの作品と対峙することは、私にとって自分の化けの皮を一度剥がしてひっくり返して、裏と表がぐちゃぐちゃになるまで言葉と格闘することなんだと覚悟している。

やけたトタン屋根の上の猫

テネシー・ウィリアムズ

Tennessee Williams

テネシー・ウィリアムズ（1911年3月26日 - 1983年2月25日）は、アメリカ合衆国のミシシッピ州コロンバス生まれの劇作家。本名はトマス・ラニアー・ウィリアムズ（Thomas Lanier Williams）。愛称の「テネシー」はその南部訛りからセントルイスでの学友に付けられた。不況時代のセントルイスで不幸な家庭環境のもと青春時代を送る。各地を放浪、大学、職をかえながら、創作していたが、1944年『ガラスの動物園』がブロードウェイで大成功し、47年の『欲望という名の電車』、55年の『やけたトタン屋根の上の猫』で2度ピュリッツァー賞を受賞。その名声の裏で、生涯負いつづけた孤独との葛藤から私生活は荒れていた。83年、ニューヨークのホテルの一室で事故死。



常田景子

Tsuneda Keiko

神奈川県生まれ。横浜、富山、神戸、大阪、東京で育つ。東京大学文学部心理学科卒。大学在学中、劇団夢の遊眠社に入団。文学座附属演劇研究所20期。木山事務所、如月小春主宰NOISEなどで俳優として活動するかたわら翻訳を始め、バルコ劇場制作部勤務を経て、現在は上演台本を中心に翻訳に携わる。初上演作品は1993年、宮本亜門演出バルコ劇場公演『滅びかけた人類、その愛の本質とは…』。2001年、第8回湯浅芳子賞、翻訳・脚色部門受賞。近年の主な上演作品に、『グレイ・ガーデンズ』『奇跡の人』『サンデー・イン・ザ・パーク・ウィズ・ジョージ』『回転木馬』『シカゴ』『6週間のダンスレッスン』『ペテン師と詐欺師』『ピアフ』『ミザリー』『ディスタンス・フロム・ヒア』『伝説の女優』『ヴァギナ・モノローグス』『スタッフ・ハブンズ』『サムワン』『パーマネント・ウェイ』『ア・ナンバー』『ウィンズロウ・ボーイ』『デモクラシー』『ママが私に言ったこと』『ダム・ウェイター』など。翻訳書に、『美しさという神話』『路上の砂塵』『グードゥーの神々』『ダ・ヴィンチとマキアヴェッリ』『戯曲の読み方』『現代戯曲の設計』『リディキュラス!』などがある。

松本祐子

Matsumoto Yuko

1992年、文学座附属演劇研究所に入所、97年より文学座座員に。99年11月より文化庁派遣芸術家在外研修員として1年間、ロンドンにて研修。文学座のみならず数々の作品の演出を手がける。主な演出作品に『冬のひまわり』『秋の螢』『音の世界』『女人湯』『ホームバディ/カプセル』『ぬけがら』『犀』など文学座公演のほか、流山児プロデュース『ガラスの動物園』、海のサーカス『アジアンスイーツ』、コマプロダクション『ミザリー』、ホリプロ『ピーターパン』『サムワン』『ウーマン・イン・ホワイト』など。2001年『ペンテコスト』上演に対し、湯浅芳子賞を受賞のほか、05年『ぬけがら』『ピーターパン』の演出に対し、第47回毎日芸術賞・千田是也賞を受賞。

新国立劇場では04年に『てのひらのこびと』、08年に『鳥瞰図』を演出している。現在、桜美林大学総合文化学科にて非常勤講師を勤めている。

